

芸の世界からとどけられた

鳳の声・鶴の声

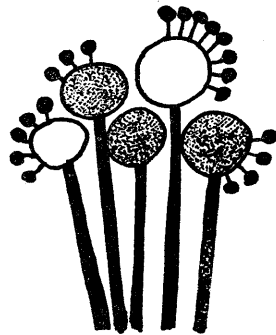
これは、昨年のみどり会夏季研修会シンポジウムより、竹田人形座、竹田扇之助さんのお話をまとめたものです。

竹田さんの人形劇の鮮やかな風情というのには非常に大勢の方がごらんになつていてと思います。今日はその生のお声に触れながら、竹田さんの人形劇というのがなんなのか、人形劇に託されているものが一体なんなのかということを考えてみたいと思います。

竹田扇之助

幼児体験としての人形

私、もう人形しか能がないんですね。人形に触れているか……。この間、NHKさんの取材で、生まれました伊那と一緒に参ったんです。母にNHKの方がいろいろインタビューしまして、初めていろんな話を聞いたんですが、とにかくちっちゃい時から人形ばかり作っていた。親父さんが、男のくせに人形なんか作るっていうんで、川の中に捨ててしまうと、押入れの中で作っ



た。押入れの中で作っているのを見つかつて、近頃は家にいないから人形を作っていないだろうと思つたら、屋根の上で作っていった。自分の事でありながら、本当に母が話すのを聞いてびっくりしちゃった。人形以外のことほとんど何もしてなかったらしいですね。

そうして大きくなってきますと、とても芝居が好きでした。私の子供の頃ってというのは、学校が許可してくれない。芸能というのを見ますと必ずわかつてしまつて、翌日廊下に半日ぐらい立たされた。でも、そんなことにめげずに一生懸命お芝居見たんですね。私の家は食べ物商売をやつておりましたから芸者衆もずい分出入りしておりました。町に一〇〇人からの芸者衆がおりまして、ちゃんと義太夫のいわゆるチョボ、歌舞伎に出てまいります。浄瑠璃を語る太夫さんと三味線ですね。こんな方もちゃんと住んでいたんです。子供の頃、シーズンになりますと、東京からお師匠さんがみえて歌舞伎の有名な狂言を毎年毎年上演しました。学校から帰りますと、カバンをボンと放り込んではお見番へ行つてずうっと芸者衆の稽古がはねるまで見てたんですね。

そうしている内に、作るだけで安堵していた人形をなんとか動かしてみたいという欲が出てきたんですね。伊那の山の中ですからそんなもの指導してくれる人もいませんし、そんな本もござい

ません。戦争中に大政翼賛会で出しました薄っぺらな本が見つかりまして、これで片手使いの人形を一生懸命糊も紙もない時代でしたけれど作つてやっています。背負子に背負つては婦人会に行つて慰問したり、隣り組を廻つて見せたり。そんな時に終戦を迎えまして、九代目結城孫三郎という糸あやつり中興の祖といわれる名人が、私たちの町に参りました。それを見た途端に、一生を賭けるのはこれだと直観的に思つちやうたんですね。

家を勧当されて焼野原の東京へ出てまいりました。幸福なことに、当時は、日本の古典芸能をなさる名人の方々が、焼野原の、本当に小さな小屋でいろんなものを見せておりました。そうして四十近くまで、本当に日本のそういったものの中だけで頑なに私、生きてきたんです。ところが、なんか変な夢が出てきて、日本の糸あやつり一生懸命やっているんだから、世界中の人形劇がどうやっているのか見てみたいなと思うようになりました。

丁度、世界一周八十日間なんていう映画が封切られた頃で、三月月にわたりまして、世界の人形劇場を見て参りました。そこでできたお友達がいると引つ張り出してくれて、外国の公演などができるようになりました。

初めての外国公演

(外国の子供に浄瑠璃を見せる)

初めて外国からお座敷がかかってまいりましたのが、西ドイツのポツハムにある国立人形研究所で、初回の外国旅行の時に訪問したところです。大人の方が見られるというものですから私、浄瑠璃のお芝居ばかりを持っていったんです。ところが飛行機の都合で一日早く着いてしまった。一日休ませておくのはもったいないというので、フェスティバルの最初の日に公演をしてくれという話になったんですが、幕が開く前にそこから見てびっくりしたんです。場内のお客さんは大人なんてどこにもいやしない。幼稚園から中学校ぐらいの子でいっぱいなんです。だってそうでしょう、日本でだって浄瑠璃のお芝居を私たちがいたしますと、やっていてつらくなってくるんです。もうお客さんがあきてきたな、つまんなそうな顔をしているなっていうのがツウーッと胸にきてしまうんです。外国の子にこのお芝居を見せる幕を開けて一体どうなるのかと思って……。初めて外国に呼んでもらって、これでしょうってしまったらどんなことになるんだらうと思ひまして、本当に震えがくるくらいでした。でも仕方がないですから幕を開けて又びっくりしたんです。ちゃんとツボになると手がくるんで

す。

御存知でしょうけど、日本の古いお芝居というのは置歌というのがみんなあります。登場してくる前に、その情景を歌う浄瑠璃とか長唄だとか、清元だとか、下座唄だとか、いろいろあるわけです。それをまるで聴きながら、いい気持ちになって出ていかれるんです。お客さんが本当にいい気持ちになってるのが、こっちに伝わってくるんです。なんだか初めこわくて震えたのが、どんどんうれしくなってきた、お客さんと私たち、もう胸が一つになっちゃったみたいな気持ち。お客さんが子供だとか、大人だとか忘れてしまったんですね。

終わりますと、何度も何度もアンコールしてくれるんです。私はもう横文字なんてのは一切読めませんし、もちろんしゃべれませんが、子供たちも日本語はできませんけれども、お互いに、今の日本人どうして話すよりか、もっと素晴らしいものを、子供たちがホッペから、目から、全体で舞台に投げかけてくれる。名残り惜しそうにみんな振り返りながら帰っていききました。

あんまりすごいものですから、私、このポツハムの子というのは、きつと特別な、日本でいうと演劇教育をうけた子だらうと思っしまいました。

ところが、それからボンを中心に十二の町をずうつと南から北

まで公演を一ヶ月間しました。全部、昼の部は子供で、すごいんです。早稲田を出て、絵の勉強にドイツに来ているという学生さんが通訳でついてくれたんですが、「竹田さんの舞台見ているよるか、客席見ている方が楽しい」というんですね。ドイツ人がこんなに興奮して、子供がちゃんと見るといのは本当に不思議なくらいだというんです。

終わってから研究所の方に聞いたんです。大人でも浄瑠璃のお芝居なんて、じいっと見ていない。どうしてああいう風になっちゃうと、こつちが手を打ってほしいと思うところで、手がくるんでしようね、心が踊ってくるんでしようねと言ったら、ドイツの場合、ちゃんと子供はここまでという線のもと、こういうものをわかってほしいなというものを、わかろうと、わかるまいと、ちゃんと小さいうちからどんどん聴かせたり見せたりしている。あなたがここで手を打ってほしいなんてことは子供たちはきつとわからずに、肌で、耳で、目で感じて、手を打ってくるんでしようねと言ったんです。

日本の糸あやつり

私は糸あやつりの人形をやってまいりました。新しい人形劇を

される方に、私、戦後からずいぶん言われました。日本の糸あやつりは古いと、じゃ、古いという方たちはどこから勉強したのかわかって、私、思ったんです。ドイツだとか、ソビエトだとか、おそらくそういうところから入ってきたんだろうと思います。明治以後の演劇理論というものは、

ところがそのドイツに行ったら、日本の糸あやつりは音楽だっているんです。なぜ音楽ですかと言ったら、糸あやつりが持っている、ピクッ、ピクッと上へ引つ張るあの欠点、ちゃんと美しく、リズムに整理されていると言うんですね。一番日本で古い古いと言われる糸あやつりが、そう言う人達が勉強してきた本家本元へ行くと、素晴らしいと……。私、そのあたりから、非常にいろいろの疑問を持つようになりました。

考えてみたら、先ほどお話ししたNHKさんの取材旅行で、伊那谷をずうっと廻りまして、山の中に残っている歌舞伎だとか、お客さんについている野舞台だとか、いろいろなものを見ただけですが、子供の頃見た印象というのは強烈に残っているんです。

飯田という町には、日本の上方、それから東京の千両役者がみんな来て、舞台上だったという、とても芸能にすぐれたところがあるんです。私は三歳かそこらで見たんですが、今考えると、あれ、車曳きなんです。そんな事が強烈に印象に残っているわけ

す。

日本に今ある、子供はこれだけしかわからない、なんでも教育と理論で押しまくっていくものも、私、結構だと思います。

でも、日本人が何百年もかかって行なって、残してくれた伝統芸能が、明治百年でガサガサくずれていった中でも残った、本当に貴重な糸あやつりです。それを私が幸か不幸か、人形気違いのために、一生懸命父から譲り受けて、現在までやっているわけです。これをひとつ生かして、なんとか昔から続いている演出の技法だとか、あやつる技法だとかをうまく活しながら、お母さんも子供もわかるようなお芝居ができないものかなと、たびたびの外国公演を続けたり、幼稚園の先生方と向こうの人形劇と教育とが結ばれている現場を歩いたりしたことなどから、考えつくようになりました。

そして、明治百年に、「明治」という糸あやつりの長編映画をつくった時に建てた、糸あやつり専門の映画スタジオを使って、昭和四十八年から徐々に始めて、五十年から十五日間、三十回ずつの夏の公演をするようになりました。ある時は文楽の方たちに作曲をして演奏をいただいたり、新作の浄瑠璃だとか、ミュージカルだとか、あらゆるものをずうっとやってきました。

そのようなとき、昨年、東京では二三区のうちで一番文化不

毛の地といわれている足立区が、日本で初めてですけれど、公費を投じて、私どもが理想的に上演できる、また理想的にのらんだだけの劇場を造って下さったんです。今年で二年目の公演をその劇場でやっているわけですが、今まで私達が幼児の教育というものから学んだものとは全然別の形で御覧になっていたいております。

なんで子供にわかるものをしないんですかという方もあるんですが……。昨年はこけら落しで、日本の人形劇場ができたんだから西洋のものをやることはないっていうんで、三番叟で、ちゃんと古格に火打式から始めまして、「鶴の笛」という新作、「橋弁慶」と、「寿三題」というおめでたいものばかりやりました。

ところがお母さん達は、「あの初めに出た、三番叟ってお人形がかぶっている帽子は何なの？」と子どもに聞かれたって説明ができない。自分の国の芸能が全然説明できないっていうんですから、こんな不幸なことはないと思ひまして、途中から解説に出て、私お話を始めたんですけど……。

人形劇というものを、子供さんが幼い時に見た強烈な印象というものは、きつと一生を左右するくらいな、なにか大きな力があると思ひます。私がやっていることが少しでもいいなと思ひになつたら、教育とかなんとか、めんどろくさいことをおっしゃら

ずに、どうぞお子さんをお連れになってお見せいただきたいと思
います。日本人ですから、日本人が残してくれた芸能を子供のう
ちに見なかつたら、これはおかしなことになると思いますよ。

七年目の「マイ・フェア・レディ」

(自分で自分をコントロールできる力)

芝居ってというのは、何十回でも、何千回でも、何万回でも役者
は、初演の時と同じ感動を、どういう生理状態であろうと、どう
いう悲しみであろうと、舞台上で表現していかなくてはなりません
。絵描きさんだとか彫刻家は、パッとイメージがわいた時
に、夜中でもなんでも、ダッダッダッと描きながったり、つくり
あげて、作品を残せばいいんですけども、舞台上立つ商売という
のは大変なことだと思います。

うちでたいそう当りました「雪ん子」の芝居なんかは、日本
中で何千回とやって、舞台の不備なところ、まっすぐ立てないよ
うな学校のぶち抜き教室、いろんなところでいたします。でもい
つも初演の時のようにふるえながらやらなくちゃいけないわけ
ですね。これは苦難なことです。でも、私の養父の竹田三之助の芝
居を見ておりますと、お客さんはその時によって変わりますが、
今日のお客はわからねえぞって一言そでで出ていきます

と、いつもやっているお芝居を、全く手を抜いて、ポンポコ、ポ
ンポコやるんですね。でもその手を抜いたのがいいんです。素晴
らしい。どうして一つの芝居がこんなに変わって、ちゃんとお客
をひきつけて見せるのかなと、いつでもそのことに酔いました。

ブロードウェイで「マイ・フェア・レディ」を初めて見ました
時のことです。当時すでに七年目をやっているというのに、エプ
ロン・ステーシへずうっと出てくると、主役、もう六十すぎのお
婆さんですね、首のあたりシワだらけ。ところが初日みたいに目
はキラキラ輝いて、身体中からワーツとお客さんを包み込んでし
まう。ものすごい感動でした。なにが感動かというと、自分がと
ても苦しんでいることをこの人は、簡単ではないでしょうけれ
ど、ちゃんと七年間も、同じ芝居を毎日毎日やってくれていると
いう感動だったんです。

どんなにしても、これはこの役者さんに、楽屋口で待ってい
て、手でもどこでもいいからとにかくさわって、その御利益をい
ただこうと思っただけです。

これは「マイ・フェア・レディ」ばかりではないと思います。
いろいろなお芝居見ましたが、ほんとにみんな、今日、このお芝
居のために、私は生れてきたんだよというような顔をしてやって
いるんですね。日本でもそうです。父(養父)を一つ例にとりま

しても、父は、人形というものを教えてくれたわけではないんです。横に坐って見てただけ。でも、やってるのを見てたものを、おいやれよと、舞台上で明日やらせてもらうというのは、もう何の抵抗もありませんでした。でも見たことも、聞いたこともないお芝居でも、二、三分、こうでこうだよとボンボンと口だけで言うって舞台上げさせられちゃうんです。そして、聞こえよがしに、あそこが悪い、ここが悪いと言うんですね。

人形が楽屋につる下がっているのですが、勉強したいからと、他人が使っている人形にさわろうものなら大変です。人形が狂っちゃうと追いかけてぶんなぐられた。

朝起きれば掃除すること、雑巾がけすること、そんなことばかりやっていた。

でも今考えてみると、やっぱりそういうことが本当にどんな立場になっても、どんな身体の状態でも、精神状態でも、きちっと自分でコントロールして、踏み込ませて、ある程度の段階までは他人の身体でなく、自分の身体として、自分の頭で操作できる力を養ってくれたんだと思うんです。

羨

ロンドンでクリスマスからお正月にかけてずうっとお芝居をいろいろ見ていたことがありました。ロンドンで楽しいのは、その頃になりますと、ちゃんと大人が見る劇場で子供のものを何の手抜きもなく見せていて、ほんとうにうれしかったんです。コメディアン劇場ではコメディ、レビューをやる劇場ではレビュー、オペレッタ・コペント・ガーデンでも同じように子供にわかるものを毎日演っております。バレエでは、「シンデレラ」とか、「ジゼル」とか。

ある日、「白鳥の湖」の切符をようやく譲ってもらって探していた席が五階だか六階の一番上の、それも舞台のつけ根なんです。幕が開いたら、舞台がまるで三分の一しか見えない。その時に驚いたのは、小学生らしい男の子を三人ぐらい連れた若い夫婦、身なりで人を考えてはいけません、どう見ても生活の苦しい方でしたが、登山するみたいに五階まで上がってきて、そして始まる前にバレエの説明をきれいな言葉で、子供達に聞かせているのです。僕は英語はわからないけど、なんて美しい発音なんだろうなあって酔って聞いていましたよ。

お金のある子は、ちゃんと一階の真ん中で見ている。この程度の生活の人が、日本だったらこういうことにお金を使うかなと思いましたが、本当に背筋がゾクゾクとして悲しくなっています。

ました。

幼児教育の理論、理論ということも大切だと思いますけれども、もっと生活について、お芝居だとか、音楽だとか、そういうものがちゃんと……三度の食事をいたくと同じように大切なことなんだなと思いました。私たちが、毎回毎回、舞台で新しい力を持つてできるようにしつけられたと同じように、理論でなくてしつけるということが、私は大変大切なことではないかと、人形を通じながら思っているんです。

日本人というのは、世界で一番お芝居が好きで国民だったと思います。人形芝居なども世界で一番沢山の種類を持っております。文楽にしても、糸あやつりにしても、世界中どこへいっても恥ない高度の技術を持っています。それなのに、明治以後、どうしたのか、その一番大切なものをどこかへ置き忘れちゃったんですね。やたらと難しい言葉でそれを考えちゃう。

私の郷里の伊那には、黒田人形という有名な無形文化財の舞台がお客さんの中にあります。一年に一回づつ、素人の方がその技芸を伝習してやっているんです。私が行った時には、阿波の鳴門をやっておりましたが、三、四歳の女の子にお母さんが一生懸命。鳴門の筋書きを聞かせてるんです。ああ伊那にはまだこのように、しつけるお母さんがいるんだなと、とてもうれしくなっ

た。えらいことを言わずに、さりとて空気を吸うみたいにしつてお母さんがいるんだなと、救われたような気がしました。

人形劇というのはゲートも言っていますように、子供の時に、そしてあらゆる人生のいろいろのことを経てきて、また年をとって、人間の生活に失望して、再び人形劇の世界に帰ってくるということが言われますけど、そういう純粋な仕事をやっているだけに、私は身を美しくという「躰」の字をもう一度皆さんに考えていただいで、活用してくださればうれしいなと思います。

私の父の竹田三之助は、ゆかたなんかを着てゴロツと旅の宿なんかで横になっていても、美しいなあ、すがすがしいなあと思いました。六十過ぎたおじいちゃんがゆかたがけで、スツというだけでも、横から見てもすがすがしい、ちゃんとお金を払ってそういう姿を見てもいいなという気持がしました。美しいってものは、何も気取ってつくるものでもなんでもなくて、そのへんに、ゴロゴロしていなくちゃいけないもので、それをひとりで、子供達にも吸収させる立場に大人達がならなくてはいけないなあということ、今、子供達にお芝居を見て頂こうという立場に私がなりまして、いつでもそのことを考えています。

一生懸命というこ

私、ずっと小さい時から人形をつくって人形のプロになったわけですけども、一生懸命やっていると、なんにもなかったんです。楽しくて楽しくてしょうがない、やっていると。今考えて、毎日やることが楽しかったです。一生懸命やっていると、自分は言うことではなくて、はたから決めることじゃないかと、私は思っております。

今の座員の人たちは、来ると一生懸命にやって、早く名前出して、売り出したいというのがまず先にくるみたいです。でも男と男、女と女じゃ子供はできませんし、ブランドーは、ねかせばねかすほどうまくありません。だからその時期を本当に心楽しく生活しているかどうかということが、一つの目的を持ってやっていることが、はたから見ると、一生懸命であるか、ないかの判定をする根拠になるんじゃないですか。

だから、一生懸命やるという言葉は自分で言っただけでいいと思います。本当に楽しく生きていたら、はたから見ると、眼の光も違ってくるし、顔色も違ってくる。おのずとそれが、子供にも伝わってくると思いますよ。

ブロードウェイの舞台というのは、みんな生活が結びついていて、ご存知でしょう、主役やっていたって、いつ倒れたってパースと出られるように横に同じ主役の格好をした代役が立っているわけですから。生活がかかっているわけですよ。見てると、何か身を切られるように酸しさが伝わってくる。

ロンドンのウェストエンドへ行くと、それがもう一つ乗り越えられて、そんなきびしいことを忘れさせて楽しませてくれる。こは考えなくちゃいけないところだと思っております。ですから、敵しいんだ、一生懸命やっていると、旗振って見せると、子供にもそれが伝わって、離れてくるんじゃないでしょうか。一生懸命やって、酸しくやっていると、もう一まわり包んで子供に出せるようになるのがプロではないかと思っております。

私はお客さんが楽しんで、トロンとしていふふうな舞台をつくりたいと、毎日毎日思っただけでやっているんですけど、保育の専門家は同じことを教室でやるわけですね。

私、舞台へ出ますでしよう、すると、今日は何々さんが御招待で来られていますとか、自分の芸をすぐはめてくれる評論家なんかが見ておられるという、自分の二の力を三にも五にも見せようなんて意識はしていませんけど、やっぱりそういう時に

粗相があるんです。糸がからんじやったり、道具が引っくり返ったり、普段では考えられないことが起きてくるわけです。私はこんなに偉そうなことを言っていたって、本当に忘れて舞台をやるということができなくていつでも泣けるんですけどね、舞台は作品みたいに何度も書き直したりできなくて、一発勝負ですから。

淡谷のり子さんと昔、百万円の宝クジが全国中継でラジオ放送されていた頃、アトラクションでよく一緒になったんですが、楽屋が一緒だったりすると、あの方はほんとに姐御ですから、パーッとほだかになっちゃって、オッパイ出しながら、「竹田さんねえねえ」なんて話し出すんですよ。「あたし、どうしてピアノのところに手をやって、ポーズつくっているか知ってる」って言うから、「いえ、あれいい格好ですね、毎日見てもいいですよ」って言うんですね。「声をひそめて」私は毎日毎日、うまく歌えるかしらってブルブルふるえがきて、間奏の間、立っていられないから、ある日突然ピアノのところによりかかったら、ふるえが止って、お客さんにわからずに次の歌までもてるかなと思ってやったら、それがうまいくんで、それからずうっとやっているのよ、みんなはあれ、ポーズだと思ってるけどそうじゃないのよ」というんですね。

みんなつらいんですよ。だからお互い一生懸命、楽しくやりま

しょう。

美しいもの（に触れる）

私は伊那谷の両方のアルプスを見ながら育ったんですが、その頃の伊那谷はお蚕でとてもお金が入ったんです。大正時代ですね。もともと団十郎が流されたりして、芸能というものがしっかり地に根をおろしているわけです。飯田なんて町は、衣装屋さんやかつら屋さんがちゃんと成り立っていたんですよ、信州の山の中で。

私の家は、蚕を交配させて種をつくっている家で、新種をつくる仕事を、祖父のまた前からずうっとやっていたわけです。ですからお金がじゃかじゃか入るもので、蔵の中には美術品がいっぱい入っていた。そういうものが自然と眼に触れていたんですよ。

舞台に出るといふこともそうですけど、やっぱり僕たちは人形をつくらなくてはなりません。肌から触って、いい玉だとか、いい女の人の髪の毛触っていると、誰でもいい心もちですよ。理屈でなくって。やっぱりいい器だとか、美しいものに触れてるっていうことは、大変な力が貯えられていくわけです。そういうものが、僕の場合は人形という形で自然と噴き出してきたんですよ。

うね。そしてその力が、糸あやつりの技術を使って、「雪ん子」だとか、「鶴の笛」だとか、竹田人形座で皆さんにほめていただいている一連のそういうものを作り出すものになったんだと思うんです。

子供が生れたからといって、これは壊すから、これは大切なものだからと、どんどん押し入れの中や蔵の中に入れてしまったんじゃないだめだと思えますね。いつでも美しいもの、いいものが眼に触れるようにしておくということが、子供の無形の財産になるから、親の責任になるんじゃないでしょうか。

私、今、人形をやっていることを、どうしてかなあと振り返ると、いつでもそう思います。外国へ行つて、きれいな景色だとか、有名なところを見ても、ああ伊那谷はこれに負けないと誇りを持ちます。いろいろな芸能を、向こうの一流の舞台で見ても、ああ、おれは日本の糸あやつりをやっているしあわせだなあ、日本人としてしあわせだなあと思えますよね。

ですからやっぱり、お母さん方、先生方が本心に美しいものに子供さんがひとりでに触れるようにしておくことが一番大切なことなんじゃないでしょうか。

それから、私の家には中国の古い陶磁器が山とあったんです。季節によって部屋部屋にいろいろ飾り替えるわけですが、子供の

頃、両親がいない時に、こっそりと、おそろおそろ持つてみるんですよね。持つ掌の良さだとか、薄さだとか、重さだとか、質感だとかいうものが今、舞台装置にダメを出す時とか、演出なんかする時にすごく勉強になる。なんにも理屈じゃなかったんです。

先だって亡くなった、先代の三津五郎さんが、私に子供ができた時に、「お前さんね、日本の芸好きなんだから、NHKのライブラリーへ行つて、昔の名人の新内から、清元から、長唄から、義太夫から、みんなテープにとつてきて、子供がゆりかごの中に寝ているうちから、静かに静かに子守唄のかわりに流しなさいよ、日本人の完全な耳になるからってさんざん言われました。お嬢さんになつちやつてから聞かせようとか、義理でやってもだめですよ」って。

親の宿願を、なんてそんなやましいことを考えたらだめで、知らないうちに……。僕なんかそんなこと全然意識しなくて、しあわせなことに、そういうものが身についたんで、すごく感謝しています。

美しいってものは、モードであろうと、瀬戸物であろうと、なんでも変わらないですものね。

(丁)